

「ソウダンアリ ゴンクローウ カガワ」

後に全国共済農業協同組合連合会常務理事となる黒川泰一(1908〜85年)がこの電報を受け取ったのは、1931年1月9日だった。カガワとは、日本の協同組合運動と共済事業を語るときに欠かせない人物、賀川豊彦(1888〜1960年)だ。

J.A.共済 事始め

黒川は翌日、関東大震災で救援に来て以来、東京に住んでいる賀川宅に駆け付けた。賀川の下で神戸消費組合(現在のコープこうべ)を手掛けた木立義道(1899〜1979年)も来ていた。「医療組合をやることにした。木立君と一緒にやってくれ」と賀川は言う。初めて聞くことなのに、木立に意味を尋ねると「協同組合で病院を経営することらしい」と言

産業組合と保険③

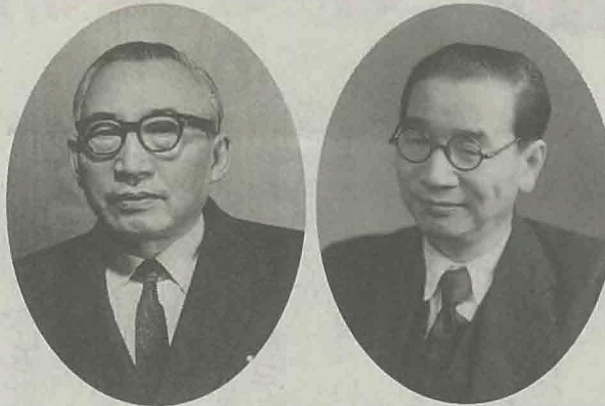
麦は三俵でたった10円で売っている。医療地獄から

昭和初期といえば、農帯では娘の身売りが社会問題となっていた。黒川の文章がある。刊「医療組合運動」誌の「カフは100把なければバット(当時、一番安機」と題した論文を寄せた。10本入り紙巻きたばこ一つ買えません。大や農民が医療から見放さ

創刊号に「国民保健の危金庫」を頭に描いている。黒川はドイツの「医療組合を思い立った頃の意見の集約であろう。

野総合病院(東京都中野区で)

賀川豊彦(賀川豊彦記念松沢資料館提供)と黒川泰一(J.A.共済連提供)同左。下は新渡戸記念中野総合病院(東京都中野区で)



東京にモデル病院開設

法に基づき医療組合でやるとうとうのことです」

「ただちに全国で始めたが、資金がない。首都・東京に病院のモデルを作れば、全国から注目され、波及するだろう」

賀川の考えは分かっていた。黒川が適地を探した。黒川は初め、新宿に開設したが、失敗し、国電中野駅近くに移転した。

賀川は並行して「東京医療利用組合」設立の準備を進めた。産組若手支会長の新渡戸稲造(1862〜1933年)を組合長に迎え、賀川は専務理事となった。申請書を東京府知事に出した。黒川が呼ばれて4カ月後のことだ。

国電中野駅近くの講堂を借りて「中野総合病院設立大講演会」を開いた。新渡戸と賀川が演壇に立った。

参考文献「黒川泰一『砂漠に途あり』医療と共済運動50年」家の光協会、薄井清「一粒の麦は死すとも」賀川豊彦「家の光協会」、並松信久「賀川豊彦と組合運動の展開 自助と共助による組織形成」京都産業経済大学論集2014年3月号

2014年3月号

営利本位の病院ではまねのできない、組合病院ならではの活動があった。月1回、家庭訪問し新生児の発育状況を調べ、育児相談に応じ、夏には臨海学校を開いた。病気を治す病院から、予防する病院を目指し、家庭医学講座を開いた。

人気が沸かないはずは、弱き救済運動に身を投じた。米騒動で苦しむ庶民生活を見て、19年に大阪購買組合共益社、翌年には神戸購買組合をつくり消費組合運動にも力を注いだ。

23年、関東大震災が発生すると、神戸にいた賀川は翌々日、東京に駆け付け救援活動を始めた。黒川が賀川と出会ったのはこの時だ。

賀川は神戸に生まれ

(次回は7月2日付)

(敬称略)

賀川は神戸に生まれ

(次回は7月2日付)

(敬称略)

賀川は神戸に生まれ

(次回は7月2日付)

(敬称略)

農民救済へ医療組合